

# 芥川だより

発行日\*\*\*2016年1月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*

## 山のハレ（儀式）とケ（日常）

漆黒の闇にライトで照らし出された山道を新雪が覆っている。両脇のクマザサも雪がつもり、せまい道も面白くなって、いかにも新年を迎える大晦日らしいまっさらな山道を演出していた。宝塚から一時間、私の守り神である「松の切り株」がライトの光に呼んで遠くからほのかな白い姿で迎えてくれる。近づくにつれその白さは強くはつきりと闇の中で浮かび上がる。「ああ、やっぱり山の神なんだ」と自分に言い聞かせた。

神に手をあわせ水を供え、すぐに夜道を歩き出す。月の光も射さない空模様で尾根筋を道が巻く時には、下界の街の夜景が見事に浮かび上がる。しかし、いったん尾根を下巻きする道に出れば、光が消えた闇夜になる。獣やもののけが出るのではないかと、妄想が頭をよぎり、とても休む気にはなれない。



天上寺の石段を登り始めた時、除夜の鐘が鳴った。鐘楼に着いて時計を見ると23時50分。「おれは、ツイテいるなあ」と思いながら、お接待のショウガ湯を3杯も有難たく頂く。本殿にお参りしてから、終夜運行している三ノ宮駅を目指して天狗尾根を駆け下る。

翌日2日は、友人たちと愛宕山に保津峡駅から登る。快晴無風、昨年の大雪とはちがいピクニック気分。頂上の休憩所で友人の山岳会に加えてもらい、雑煮などをいただき、今年の六甲山全山縦走の話題で盛り上がった。さらに本殿でお神酒の“神聖”を何杯も頂戴する。昨年の夏の千日参りの時とは違い晴れやかな気分で愛宕さんの有難味を満喫した。

大晦日の東六甲山を縦走し、天上寺の除夜の鐘を聞く。これは、私にとってハレであった。正月2日の愛宕山はハレの後のケ（宴）であった。愛宕神社の参道に並ぶ石灯籠は、ハレである真夏の夜のゴマ供養や神事、ケである昼間の多くの参拝者を見て、非日常と日常を織り込みながら生きている人々を見守り続けてきたのだろう。私は暗夜の六甲を歩くことで、愛宕神社の奥深さを思い知ったのである。

## 死をめぐるあれやこれ（16）

石川 吾郎

### 「歯が落ちる」

去年に続き正月は漢詩をご紹介。でも内容はあまりおめでたくない話で恐縮（なにせ表題が表題なので）。韓愈という唐の詩人の作。このお方、四十前で歯槽膿漏に悩まされていた模様です（長いので三分の一は略）。

去年落一牙、今年落一齒

去年は奥歯が一本、今年前歯が一本

俄然落六七、落勢殊未已

続けて六七本、その勢いは止まらない

餘存皆動搖 盡落應始止

残りの歯もぐらつく、全部抜けるのか

憶初落一時 但念豁可恥

一本目には、そのすき間バツが悪かった

及至落二三 始憂衰即死

二本三本となると、弱って死ぬかと悩んだ

每一將落時 慄慄恆在己

抜けそうになるだけで、いつもビクビク

（中略）

人言齒之落 壽命理難恃

歯がぬけたら、寿命は短いとおどされる

我言生有涯 長短俱死爾

でも人は所詮、いつかは死ぬもの

人言齒之豁 左右驚諦視

歯のすきまに、他人はびつくり

（2ページに続く）

我言莊周云 木鴈各有喜

莊子曰く、役立たずの木が天寿を全う、啼いて料理まぬがれた雁も幸いは各々

語訛黙固好 嚼廢軟還美

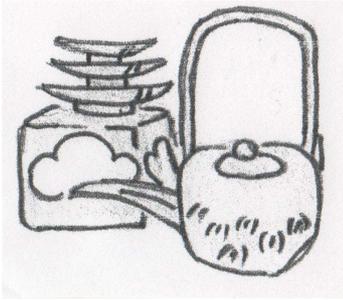
がふが言語不明瞭はこれ幸い、噛めないと軟らかいものがうまい

因歌遂成詩 持用詫妻子

そこでこの詩をしあげ、嫁と子供に見せびらかしてやろう

教訓…歯の手入れは怠りなく。歯のケアは確かに寿命に影響するようです。私のお薦めは、寝る前に歯磨きなしの歯ブラシと歯間ブラシ(大小)、それに糸ヨウジ、最後にマウスウォッシュ。全部で五分弱。これで完璧!

ちなみに韓愈の寿命は五十六年でした。確かに長寿ではないですね。



### 芥川だより一〇八号

目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなで知ろう日本の危機7	伊藤明	2
哲学屋のつぶやき 18	祖蔵哲	6
おちよこチョイぼけ 34	A O	7
素老人☆よもだ帳 22	坂本一光	8
世界一周旅行記 18	若山哲郎	10
B級サラリーマン渡世譚 31	明石幸次郎	12
大人の今昔物語 18	石川吾郎	14
雲と群衆	大江雉兎	15
孫ウオッチング	福田圭	16
埋め草	C	17
編集後記	嘉	17
女90年の軌跡	眞樺	18
俳句	土田裕	18

### みんなで知ろう日本の危機(7) マスコミの伝えない重要ニュース、国民をサル以下と考える政府とマスコミ!

伊藤明

サル年の二〇一六年が明けました。正月に私が最初に思い出したのは「朝三暮四」という四字熟語です。これはみなさんよくご存じと思いますが、改めて思い出してもらおうと以下の通り。「中国、宋の国の狙公(そこ)が、飼っている猿にトチの実を与えるのに、朝に三つ、暮れに四つやる

と言うと猿が少ないと怒ったため、朝に四つ、暮れに三つやると言うのと、たいそう喜んだということだ。『莊子』に見える故事から)。「目先の違いに気をとられて、実際は同じであるのに気がつかないこと。またうまい言葉や方法で人をだますこと、という意味だと説明されます。

この寓話を思い出した理由はもうおわかりと思いますが、昨年末のマスコミが一斉に取り上げた「軽減税率」論議です。十二月のマスコミ報道は、消費税の「軽減税率」についての報道に埋め尽くされた感がありました。ここには安倍政権と日本のマスコミのもつ重大な問題が浮き彫りにされていると思われまます。

そもそも「軽減税率」の内容といえは、来年四月に予定している一〇パーセントへの消費税増税で、食料品などを現在の八パーセントに据え置くかどうかという話で「軽減」されるわけでは全然なく従来通りの八パーセントの消費税がかかるのです。

しかしこの「軽減税率」というまやかしの言葉によって誤解されている人が私のまわりにも意外に多いのに気づきました。つまり食料品などへの消費税が減らされるのではないかと、何となく思いこまされているのです。これは安倍政権の本当に悪質な言葉のイメージ戦略で、正しく表現するならば「消費税据え置き」にすぎません。正しい意味での「軽減税率」ならば、ヨーロッパの国々が行って

いる「食料品などへの消費税の無課税など」を指すべきなのです。

この「消費税据え置き品目」議論を「軽減税率」と表現して伝える、安倍政権の悪質さをよく理解しておく必要があります。またこれをそのまま報道するマスコミ各社の態度は、安倍政権に協力している」と批判されるべきです。

「朝三暮四」の寓話では、一日にもらうトチの実の数は同じですが、今回消費税は必ず上げる、しかも庶民からより多くを「奪う」ということ、つまり現状以下になる(トチの実が減らされる)ことですから「朝三暮四」以下、ということになります。それで国民が喜ぶと考えているらしい安倍政権と自民・公明の与党

(実際公明党は支持者向けに、自分たちがこの「軽減税率を実現させた」と自慢げに宣伝をしているといえます)、そして嬉々としてこのニュースを伝え続けたマスコミ各社は、国民を「朝三暮四」のサル以下と考えている、ということになるでしょう。こんなに国民を侮辱した話はないのではないのでしょうか。

### 偽りの財源問題

そして偽りの「軽減税率」議論には、かならず財源問題に言及されます。これは食品などの消費税を据え置けば、その減った分の税収をどうするかということ、それは社会保障関連の支出を削減して確保すべきという、驚くべき議論で、

マスクもこれをまともに批判したものは見あたりませんでした。

もともと消費税は導入時に、社会保障の目的に使用すると国民に説明をして政府が成立させた経緯があったのでした。しかし実際には、消費税増税には常に必ず法人税の減税が実施されて、消費税は法人税減税の補填する役割を担っています。

「軽減税率」の財源を問題にするならば、法人税減税を止め、辺野古基地建設を止め、オスプレイの購入を止め、さらに米軍への思いやり予算を削ればすぐに確保できるというものです。こういったまったくな批判を絶対口にしようにしない、現在のマスクの姿勢にもその異常さを痛感します。

### 新聞へ適用される「軽減税率」

さらに、今回恐らく皆さんが違和感を持たれたと思われるのが、食品とともに新聞にも「軽減税率」が適用されたことでしょう。

まず考えてみましょう。大部分の国民の立場に立つとすれば、消費税についてマスクの本来とるべき姿勢とはどういうものでしょうか。それははっきりしていません。日本の経済の景気後退をさらに進行させ、格差を拡大し、国民の大部分をさらに貧困に追いやることとはつきりしている消費税を止めよ、と政府に主張していく姿勢のほうです。「ジャーナリ

ズム」と名のつくものは、必ず政府を監視して批判的な姿勢をもつ必要があるものです。

しかし驚くべきことに日本のマスクミの中で「消費税増税を止めよ」と主張するものは、(少なくとも全国紙についていえば)一社としてありません。

これには、実は驚くべき裏事情があるのです。つまり「日本新聞協会」という大手のマスクミが作る団体が「軽減税率」を新聞に適用するようにかねてから主張を続けているのです。消費税増税そのものを批判する全国紙(したがってテレビ報道)が皆無であったのはこのせいだったのです。つまり「消費税増税を批判しないかわりに、新聞に『軽減税率』を適用してね」という卑しい裏取引! 案の定、

新聞の消費税は食料品とともに「据え置き」の適用となることが決まったと報道されました。マスクはその目的を遂げて大喜びです。

しかしこれは自分の首を締めるものにしかなりません。このようなマスクミの姿勢は、庶民にとつての裏切りであり、実に卑劣な姿だと言えます。国民の大部分を裏切る大新聞は、いくら消費税が「据え置き」されたとしても、衰退の一途をたどる運命にあります。なぜなら消費税増税は国民の大部分のさらなる貧困化を加速してしまいますので、国民は新聞などにお金を割くことができなくなり、ますます新聞を解約することになるでしょう。

自分たちの側に立たず、自分たちを貧困と不幸に陥れる情報をふりまく新聞など、誰も読まなくなるのは当然の話なのです。ネットをみれば通り一遍のニュースなら無料で見られる世の中なのですからね。

さらにいま一つ指摘できるのは、マスクミのスポンサーがほとんど大企業に占められていることで、日本のマスクミは大企業の不利益になることは伝ええない・批判しないという、国民を裏切り欺く姿勢を止められないという構造になっているのです。

これらのことから、各全国紙の論調や大新聞の系列のテレビ各局およびNHKで、消費税増税そのものに対する批判が一切なされていないことを十分説得的に説明していると思います(NHK会長はすでに安倍氏の家臣。裏で安倍政権とマスクミ各社ないし新聞協会との取引がさされてきたと考えるのが自然です。たとえば安倍首相とマスクミ各社の経営者やNHK解説委員などが会食を重ねていることが伝えられているのですが、そんな場でこの裏取引がなされていることでしょう。実に日本のマスクミは権力の監視をするというジャーリズムの役割を放棄してしまっているのです。

### 大企業が消費税増税を求める構造

わが国の税制は過去二十五間に激変しました。一九九〇年ころの税収構造は、所得税二十七兆円、法人税十九兆円、消

費税三兆円でした。これが二〇一五年度には、所得税十六兆円(激減)、法人税十一兆円(激減)、消費税十七兆円(激増)と変わりました。つまり富裕層が支払う所得税と法人税が激減し、貧しいものの負担が大きい逆進性があるといわれる消費税が激増しているのです。消費税はいまや国家の収入のトップ項目になっています。徹底的な庶民いじめ、資本家・金持ち優遇の政策が強行されてきたことは一目瞭然です。その上に二〇一七年度に、消費税を一〇パーセントに引き上げ、かつ法人税を二〇パーセント台まで減税するというわけですよ。

社会保障費を切り捨てる「超緊縮」財政、中低所得者を直撃する税制といった政策で、安倍政権は国民の大多数の生活を破壊しつづけています。

先回(二〇五号)この欄で扱った「税」についての項でお話したように、大企業の集まりである「経団連」が消費税増税を一貫して主張をしています。これはなぜかという点、ここにも大きなカラクリがあります。

まず消費税増税には必ず法人税の減税がセットで行われること(今回は二十パーセント台までの減税がされる見込み)があります。さらに「輸出戻し税」という国民にあまり知られない、輸出大企業に究極の優遇税制があるのです。これは簡単にいえば、輸出製品にはその価格に消

費税分の上乗せができないので、その分を政府が補填して政府が輸出企業に支払うというものなのです。現実には消費税分は下請け企業が泣きを見て、親企業に請求できないのが現実ですので、この「輸出戻し税」はそのまま輸出大企業の利益になるのです。これは消費税が上がれば、それに比例して増額されるので、輸出大企業は何もしないで濡れ手に粟の大もうけができるのです。その結果、たとえば愛知県豊田市の税務署は毎年、トヨタ自動車に支払う巨額の輸出戻し税で赤字を出しており、日本最大の巨大企業トヨタ自動車はかつて数年間一銭も税金を払わなくてよかったという驚くべき事実があるのです（二〇五号を参照）。

そして消費税の増税分と、法人税減税分・輸出戻し税はほぼ同規模の額となり、政府収入という観点からすると（お金には色は付いていませんので）、消費税はこれまで政府が主張してきたように社会保障分野に使われるというのは、真つ赤なウソで、法人税減税と輸出戻し税の財源で消えてなくなるとというのが現実なのです。このことを読者のみなさんによくご理解していただきたいと思えます。

### 危険な改憲議論

この正月に神社に初詣に行かれた方は、主要な神社に本社本庁の主張する「改憲・署名」のポスターが貼られていたの

に気づかれたでしょうか。これは日本の年中行事に対する冒瀆であり、これを見て正月早々イヤな気分になった方も大勢おられたのではないのでしょうか。

さらに元日に、与党・安倍政権が、憲法九条を変えるのではなく「緊急事態条項」を盛り込むという理由で改憲をする、という方針を出しているということが伝えられました。

これは昨年末パリで起きたようなテロや大災害などのときに出すというもので、その内容は非常に危険なものです。問題点を上げれば、

- ・国会の事前同意の必要がない。
- ・基本的人権が制限されてしまう。
- ・法律と同じ効果をもつ政令の制定が可能になる。

- ・総理大臣が予算措置を行える。
- ・「緊急事態」に期間の制限がない。
- ・内閣は衆議院の任期を延長することができる。

- ・地方自治がなくなる。
- ・司法も行政に従わざるを得なくなる。
- ・集会・結社・言論・報道の自由が制限される。

ということが可能になるものです。これは要するに戦前の「厳戒令」の復活と言えるものです。その期間にも制限がないことから、いったん発動した「緊急事態」がその後、延々と恒常化することになりかねません。これはまさにナチスが行っ

たこととそっくりなのです。麻生財務大臣の言った「ナチスの手口に学んだらどうかね」の発言をそのまま実行するものと言えます。この独裁体制を可能にする内容の「緊急事態条項」を憲法に盛り込むことを、災害時やテロに備えてという口実で進めようとしているのです。そのため今年七月に予定されている参院選を、衆参同時選挙にして一挙に衆参両院で三分の二を獲得しようという思惑だと伝えられています。

何としてもこれを止めなければなりません。これを許してしまうとこの国が止めどない軍国化へと突き進んでしまうことは、火を見るより明らかです。戦前の軍国日本やナチス下のドイツの再現になつてしまうでしょう。

### 国会議論と安倍政権の正体

去年の秋には、憲法で規定された臨時国会の招集の請求を野党から提出されたにもかかわらず、安倍政権は「外交日程」を理由に臨時国会を開かないという憲法違反を犯しています。その外交はといえば、タジキスタンなどの弱小国へのほとんど意味のないバラマキ外交をして国費を無駄に使っているのです。また新年早々の通常国会の開催中にもかかわらず、追及をかわすために、さらに意味のない外遊を繰り返す予定をいれているといえます。

この国会で野党には徹底的に安倍政権を追及してもらいたいと思います。

- ① 安保法と集団的自衛権が憲法違反であり取り消すべき。
- ② TPPの不当性。売国的協定であること。
- ③ 辺野古基地建設を止めること。
- ④ 消費税増税・法人税減税を止めること。
- ⑤ アベノミクスの失敗とデフレ脱却ができていないこと。
- ⑥ 東電福島島の収束できない現実。
- ⑦ 年金の運用失敗などの問題、などなど。追及すべき問題は山積みです。

これまで三年間を見ていると、安倍政権政策の本質は大資本の利益を最大化することを徹底して追求しているといえます。法人税減税の大盤振る舞いもその一環です。そして国民の生命や生活を守ることは、安倍政権は少しも本気で考えていない。考えているポーズをしているだけに見えます。口当たりのよい政策は抽象的か一過性のもので実効性のあるものはありません（「一億総活躍」、「介護離職ゼロ」、TPPの農家保障、などなど）

さらに安倍政権は、日本の経済を進展させ豊かにしようとするのではなく、彼らのやっていることは緊縮財政と破綻した金融政策だけで、その上に消費税増税をして、国民の財産をかすめ取り、大企業の利益と米国を中心とした海外のグローバル投資家に付け替えることだといえます。このままでは、日本の国民の富が海外に流出を続けるばかりとなるの

です。

安倍政権はもともとデフレ脱却という経済政策への期待から成立したのですが、三年経過をして大企業の利益だけは空前の規模になっているものの、大部分の国民を貧困化の危機に陥れ、依然としてデフレから脱却できない状態にあります（これは安倍氏自身も「道半ば」と認めています）。アベノミクスの失敗は明らかであり、これ以上政権を担う資格はないのです。

こうして見てくると、安倍政権は、大企業・経団連とグローバル投資家の利益を代表している政府なのであり、日本の国民大部分の利益を代表した政府ではない、ということがはつきり浮き彫りになります。そしてさらに彼らは改憲を通して、戦前の日本やナチスドイツなみの独裁国家を実現しようと呼びかけています。

安倍政権にこれほどの横暴を許す原因はマスコミを支配していることです。大企業を優先することとマスコミ幹部を手なづけることによって、日本の情報空間を支配してしまっているのです。狡猾な安倍一味は、NHKやマスコミ各社に鉛と鞭を使って巧妙な情報操作を可能にしています。これにより、マスコミには国民にとって重要な情報や議論が隠され、「軽減税率」といった欺瞞に満ちた情報が意図的に流されるのです。

さらには今ひとつは、政治機構への周

到な人事配置により、制度の隙をついて

横暴なやり方を可能にしていることも指摘する必要があります（日銀総裁・副総裁、最高裁人事、NHK会長人事、内閣法制局など）。この意味では、安倍政権はこれまでの政府になく狡猾かつ周到といえます。

私たちはどうしても、この危険きわまりない、日本を戦争と貧困と格差へと陥れる安倍一味から、われわれの国をとりもどさなければなりません。

そのためには、今年の七月に予定されている参院選（衆参同時選挙になる可能性もある）で、反安倍・反戦争法制（したがって改憲を許さない）勢力を結集して、安倍政権を倒す必要があります。少なくとも与党と与党補完勢力に三分の二の議席をとらせないことが絶対に必要になるのです。このような大企業とグローバル投資家の手先の勢力から、わが国を取り戻しましょう！

### 「反安倍・反戦争法制の統一候補ファンクラブ」

そこで私たちはネットで、「反安倍・反戦争法制の統一候補ファンクラブ」を立ち上げました。これは選挙で反安倍・反戦争法制で野党統一候補が立てば、どの党であれ投票するという意志表示で、反安倍勢力の統一を後押ししようというものです。ご賛同をよろしくお願いしま

す！すでに多くの方の賛同と共感のメッセージをいただいています。以下のURLからアクセスしてください。

<https://goo.gl/b1VqJf>

あるいは「反安倍・反戦争法制の統一候補ファンクラブ」で検索をして、Change.org のキャンペーンページをご覧ください。

また同時に、総掛かり行動実行委員会「戦争法の廃止を求める二〇〇〇万人統一署名」にも、ぜひ署名の協力をよろしくお願いいたします。

最後に、新年に精神科医・香川リカさんが、東京新宿駅前でされた名スピーチを引用させていただきます。

「安倍政権が誕生してから、秘密保護法の制定、生活保護法や派遣法の改悪、原発再稼働、沖縄辺野古本体工事への強制着工そして解釈改憲による戦争法の制定など、ひとりひとりの暮らしと気持ちと命を踏みにじるような政策がどんどん実行されています。マスメディアへの公権力の介入も露骨に行われ、何が起きているのか、知ることさえむずかしくなりつつあります。また、そういった政権の雰囲気の後押しされて、在日外国人へのヘイトスピーチ、生活保護受給者へのバッシングを平気で行う人たちもあとを絶ちません。

「一億総活躍」などという単純きわまり

ない言葉で国民をひとくくりにしようとする安倍政権は、私たちが労働マシーン、さらには戦闘マシーンとして国家に奉仕することを求めているかのようにです。それはつまり、もう自分以外の誰かの胸のうちなど想像しなくてよい、意識を、心を捨ててよい、人間であることをやめてよい、ということにほかなりません。

意識や心があるからこそ、私たちは、目をあげれば現実を見ることができ、目を閉じれば果てしない記憶や想像の旅に出ることができません。何百万年もの進化の結果、手に入れたこのすばらしい人間としての心を、権力によって奪われることなどあってよいわけはありません。

みなさん、私たちがやろうとしているのは政治の闘いではありません。文化や文明の闘いでもない、と私は思っている。これは人間としての闘い、人間であることを守る闘いです。私たちが言葉で奪わないで。私たちが心から奪わないで。人間であることをやめろ、と言わないで。私は、安倍政権にそう言いたい。」



個人に自由な意志はあるのか

新自由主義の「自由」から「自由とは何か」を考える第二回目。自由とは二つの側面があるということをまずお話ししました。それは人間個人を機軸にして外的と内的な区分です。外的なものは歴史とともに変化し近代「自由権」と現れており、「表現的」「身体および精神的拘束」「経済活動」の三つに分類されるということでした。

今回は内的自由ですが、本題に入る前に最近自由について若者と話をする機会があったので少しその話をしましょう。最近の安保法制や国歌起立問題など、憲法や法律が個人の自由を規制することが多くなってきたというがそれについてどのように思うかということを若い人に聞いてみた。すると意外な返答があった。声高々に反対するということは全体の空気を讀んでいない、場を乱すいやな気分になるという。法令で決められても従うかどうかは自分で決めればいいし個人の自由だ。君が代を歌うのが個人的にいやでも起立して歌えばいい、心で反対しいればいいだけだ。これは、少数の人の意見かもしれないが現代の潮流がわかるような気がした。まず歴史的な背景の認識がないこと。そして今獲得している個人の自

由が自明だと思っていること。個人の内面的な自由と社会的自由のつながりが理解できていないことです。自分の心で、頭で自由に考え、身の回りだけで好きに行動できていればそれで満足という考えです。将来に対する危機を感じました。

それでは今回は個人の内面的な自由についての話に移りましょう。予告していた「宿題」はどうでしたでしょうか。「あなたの目の前にまったく同じコップが二つ置いてあり、自由に選んでくださいといわれたとき、あなたは左、右どちらのコップを選びますか？」という問題でした。さて問題は大した決断ではないですが、ここから深く考えずに進められると思われませんが、ここに自由意志の重大な秘密が隠されています。もし、あなたがなんとなく、右のコップを取ったとしましょう。どうして右を選んだのと聞かれてたらやはりなんとなくと答えるでしょう。「なんとなく」というのは理由などわからなくということですから自分の「意思」でえらんだということではないでしょう。では次に、右ききだから取りやすい右のコップを選んだという答えはどうでしょう。これは合理的な理由ですね。でもこの合理的な理由にしたがって選んだとしたら自分の自由な意思にしたがって選んだということにはならないでしょう。いやそれは違う、その合理的な理由に従ったのは私の意思が自由にきめたのだという人

がいるかもしれません。ではその合理的な理由に従わない自由もあったのになぜ合理的な理由を選んだのと聞くと、なんとなくとしか答えられません。私達が自分なぜそれを選んだかの仕組みが事前に完全にわかっていたらそれは自由意志ではなくロボットののような機械的意志になってしまふし、逆にそれがわからなかつたらやっぱり「なんとなく」の自由がなつたかたということになります。

冒頭から少しややこしい話になり混乱している方もおられるとおもいますが、これがもうひとつの「自由」内面的自由、つまり人間個人の中の自由の問題です。前回お話しした外面的な自由は歴史的、社会的な影響が大きいのですが、今回の内的自由は人間個人の問題なので本源的な「人間とは」という問いと同じで哲学的な問題です。しかし個人と言っても、これが集団となつて逆に社会に影響を与えたりする基本単位ですが重要です。

さて、先の問題での回答結果からは、人間にとつて自由意志はないという結論が出てきました。これは「決定論」といっています。全ての現象はあらかじめ決まっているという固定運命論です。しかし先の問題は少しトリックがあり自由意志の説明にはならないという意見もあります。たとえばダイヤモンドと札束二つが置いてありどちらを選ぶかという選択の問題であれば、それぞれ理由をつけ選択

するでしょう。そしてまたその理由は「なんとなく」でもないし外部から強制せられたものでもないでしょう。自分の内部から出てきた「自由意志」によるものだと切り切れるでしょう。

このように一般にはやはり人間には自分で決めることが出来る自由な意志が残っていると思われています。しかし驚くことに現代の脳科学では「自由意志は存在しない」というのが多い説らしいのです。コップを取ろうとする場合、先に意志が運動神経に命令して行為を促すのではなく、手がコップを取っ手から意識があとからコップをとつたと解釈するらしいのです。これは脳波などの実験解析からわかることなので実証的です。つまり「自由意志」はないのです。こう宣言されてみると何か変に納得するものがありますね。あの時決断したのはどうも曖昧だったとか、先に決まっていたようだったなとか。よく聞く台詞に「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」というのはこのことも一部表現しているように思われます。

自由意志が存在しないとしたら人間の行動を決めているのはなにか。それを心理学では「無意識」と呼ぶのかもしれない。あの自分ではコントロール出来ない心の底にある超自我です。ここまで考えてくると人間は機械的なロボットで何かに操られている不気味な存在であると

## ああ、ぬかるみのような歯科治療・

## 後編…の巻

いうことになりませぬ。なにかがおかしい。先ほどの選択の問題ここには時間的な観念が抜け落ちるように思われます。なるほど瞬時の行動に関しては人間の意思は入り込む時間が後になり無意識が先行するという現象があると思います。しかしもう少し時間経過を広げて考えてみると、その行動の前には何がしかの意識が前もって人間の内にはあるわけです。何かを行動する前には傾向というものがあります。例えば疲れていて甘いものを食べたいたいなど意志していて、ふと見渡すと飴があつたとすると無意識に手にとり食べる。そして食べてからやはり食べたかつたのだと思うわけです。これが自由意志であり、この時、歯が病んでいたら食べるのを止める自由もあるのです。

このように考えると人間内における

「自由」はかろうじて回復されます。しかし、この意志も外部からどのような影響を受けたのか、それに対して自分の意志がどのように考え対抗したのかが「自由」の入る余地として考えられます。「自由意志」により選択したといつてもそれは誰それかの意志であつたりすれば「強制」されたことになるでしょう。しかしその「強制」も自分の意志であつたと後から考えれば自分で考えたのだということになるでしょう。

「恥の多い人生を送ってきました」という書き出しで小説を書いたのは確か太宰治（すみません、うろ覚えです。いちいち調べる根気がないので、適当に修正しながら読んで下さい）だが、私も恥の多い人生を送っている。人生全般で恥をかいているが、このところとくに痛感しているのが、歯の治療を受けているとき。前日も書いたが、私が通っている歯科医院の先生は若き熱血漢で、歯磨き指導を徹底し、予防を旨とする近代的歯医者。私は昔に生まれたので、痛まない限り歯医者には行かず、日々のメンテナンスも朝晩、歯ブラシでシャコシャコと磨く程度。

そんな不埒な患者に、先生はため息をつきながらも敢然と立ち向かい、まず糸ようじ、次に歯間ブラシ、そしてフロス、ポイントブラシ（先が細く尖った歯ブラシでタフトなどと呼ばれているらしい）等の使い方を教え、治療のたびに「ここが磨けてない」「このあたりにブラシが届いていない」と鏡を見せながら毎回、毎回、指摘する。

それだけ言われたら、少なくとも歯医

者に行く前はだれでも徹底的に磨く。もちろん、私だつて磨いた。だのに…。

「口、開けて下さい」と言われた、次の瞬間に「今日は？ 磨いてきましたか？」。

口を開けたまま、「あい？」と答える私に先生は例の手鏡を持たせて、前歯の裏側を軽くホジホジ。そして、何やら緑色の粒が出てきたではないか。今朝食べたプロッコリーのかけらだつた。いやん！

先生は疑惑のまなざしで、「磨いた後、ゆすいだら取れるはずやけどね」つて。

以来、私は歯医者に行く日の朝は緑色のモノを食べるのをやめた。プロッコリーはもちろんホウレンソウも小松菜も。ついでに、ちりめんじゃこ（目玉があるじゃないですか）とかも控え、リンゴやもやしみたいに仮にかけらが出てきても目立たない色目のモノだけを食べるようにした（そういう努力をする前に、きちんとフロスをしろ、という話であるが…）。

まあ、人間なるべく恥はかきたくない。こう書くと、フロスをサボっているように誤解されそうだが、実はせっせと励んでいて、もしたら、「フロスを強く歯茎に当てていませんか？ 強く当てると、歯茎が下がるんです。ココ、かなり下がっているなあ」だと。どうせいちゅうんじや！と言いたいところだが、もちろん、素直に反省する。強く歯茎を押すつもり

はないが、フロスが入りにくくて力を入れると、歯茎までギュッと届いてしまうのだ。

毎週（ときには二回）、歯医者に行っているというのに、「ほら、歯垢、これだけ取れた！」などと見せられるものだから、つい力を入れて磨いてしまう。そして、「ココ、疵がついている。あんまりむきになつて磨いたらダメ！」と怒られる。本当に理不尽…。

私が通っている歯科医院は、先生は一人だが、治療用の椅子が三台あつて、衛生士の女性が二人いる。先生は一人ひとりの患者に丁寧に接しながら、同時に三人を診ているかたちで、まさに離れわざ。私の治療をしながら、衛生士さんに指示を飛ばし、別の患者に話しかける。

「もうちよつと待っていてね」

「次は三月ごろに来てもらおうか」。他の患者さんとのやり取りが筒抜けなのだ。ほとんどの患者が常連（？）のようで、あるときこんな会話が聞こえてきた。

「今日は、どうしましたか？」定期健診で「あ、そう。じゃ、ちよつと見せてもらおうか。おお！ パーフェクトやね。ブラッシングがきちんとできていますし、虫歯もない。生まれつきの歯の質がいい上に過不足なくメンテナンスができていますからまったく問題ない。オッケーオッケー

「だって。けつ、いいなあ！私は心底、羨ましかった。もちろん、どんな患者なのか、治療台にいる私からは見えない。女の人だということしかわからないが、「生まれつき質のいい歯」で、しかもブラッシングがパーフェクトだと！

羨ましいといえば、仕事仲間のカオリちゃんもだ。私が最も信頼している後輩で、歯医者に通っている話をしていたら、「えっ？ 私もこの前、歯冠が取れたんですよ、一緒ですね！」と可愛いことを言うではないか。だが、続けて「でもね、その歯以外、一本も虫歯がないって言われたんです、よかったですあ！」。そりゃ、よかったね……。私なんか、歯冠が取れた歯の隣も、反対側も、その下も、その下の隣も……と要治療の歯ばかりなんですけど。

それで思い出すことがひとつある。この夏、私は久々に風邪を引いて、病院に行った。風邪ぐらいで病院に行く習慣はないのだが、咳がなかなか止まらなかったのと、友だちが乳がんの手術をするのになつていて、その付き添いを頼まれていたので、完全に治しておかなくては、という事情があったのだ。案の定、ただの風邪で、先生は「もうほとんど治っているけど、薬、いる？」と聞いてくれた。こんな良心的な問いかけをしてくれる先

生なら、と思つて私は血液検査を願ひ出した。たまたまダイエツトに成功したら、みんなに「ガン？」と聞かれてシヤクにさわつたので（普通、わかるじゃないですか、自分がガンかどうかぐらい。いや、わからないかもしれないけど、風邪以外の不調はなかったもので、まあ大丈夫だろうと）血液検査に臨んだのだ。そしたらやつぱり問題なくて、その女医さんに褒められた。「そのトシで、という注射つきだとは思ふが）珍しいわ、こんなにきれいに数値が全部、基準値内に収まっているのは。何か悪いことを言うてあげたいけど（笑）、言うことなし。この調子で、食生活をしつかりね」。

私は友だちやら家族やらに血液検査の結果を見せびらかした。めつたに人に褒められたことがないので、有頂天になつてしまったのだ。血糖値が高過ぎる、悪玉コレステロールが多過ぎると指摘されているであろう人たちに、なんと心ない仕打ちであつたことか。しかし、歯科医院でヨレヨレになつて初めて私はそういう己の傲慢さ、罪深さを思い知つた。「へえ、すごいやん」と言ってくれる腹の底で「けつ」と思われていたのだ……。やつぱり、恥の多い人生である。

(A〇)

## 素老人☆よもだ帳 (22)

坂本 一光

### ◆馬鹿丸出し戦争への道まっしぐら

「馬耳東風戦争への道まっしぐら」(一光川柳、以下同様)、でもある。

世界は戦争状態にある。この世界で国民の安全と安心を確保し、日本(心の中心)が、それを言っちゃあおしめえよ、内心の自由への侵害である)が生き残る道はただ一つ。安全保障環境の変化に対応して日米軍事同盟を新たな段階に高め、米軍の指揮下日本が戦争をする国になる道である。それこそが大国日本の取るべき国際貢献の道、安全安心の国づくりの道であると固く信じて疑わない(と見える)宰相の国に、新しい年が明けた。

新しい年に何を祈り、何を誓うか。それはこの国が戦争への道でなく、平和への道を進むことである。戦争法審議のなかで「憲法をこの法律に合わせる」と答弁した防衛大臣がいた。「政治家の失言に効くくすりなし」、である。それはさて置き、考えるべきことは、理想を現実に合わせて修正するのではなくて、理想に向かって現実を変えて行くことである。理想が現実から遊離して妖怪になる危険より、現実に立脚すると称して理想をねじ曲げ理想をもたない妖怪となることの方

が実際上の害毒は桁違いに大きい。政治は個人の生活のすべてを支配した規定するから、政治においては特にそうである。現実主義者が行う戦争は、それを始めるとなかなかやめることができない。政治家も御用政治学者も(いつの世も曲学阿政の学者はいる)、戦争をしなればならない理由ばかりを探し出すからである。戦争を進める者たちには、人命を奪うことへのためらいはない。「敵」についてはもちろん、「味方」についてもそうであろうと思う。失われた命の数は統計数字に過ぎない。

くり返しである。戦争は始めたらやめられない。戦争による問題解決をやめるしかない。それは日本国憲法の本質である。この精神は明治以来の戦争国家日本の反省と総括に基づいている。武器軍隊よりもこの精神が世界の平和に貢献するだろう。個人の尊厳も守る。

戦争はどんな人間でも悪魔にする――

『羊の歌』がよみがえる夏  
息子夫恋人父も悪魔にする戦争

『どんな人間でも悪魔ではないのだから、私は死刑に反対し、戦争はどんな人間でも悪魔にするのだから、私は戦争に反対する』(加藤周一『続・羊の歌』、五頁、岩波新書、一九六八年)。戦争法審議の行方を見ながら、私はオロオロし、これは悪魔の法律だと思った。

憲法九条かたちは心であり  
心はかたちになるというまこと  
ありふれた平和九条あればこそ  
殺し殺されずただ一人も

アメリカという国がなければない悲劇

悲劇と思わぬ政治の墮落

戦争とは何か。国語辞典によれば「い  
くさ。特に国家間で、互いに自国の意志  
を相手国に強制するために、武力を用い  
て争うこと」とある（西尾実他編、『岩  
波国語辞典』（第七版）、二〇〇九年、岩  
波書店、東京。堂々と（？）宣戦布告を  
した『特に国家間で、互いに：』という  
戦争は、第二次世界大戦を以て終わった  
のかもしれない。しかし大戦後の二〇世  
紀後半も、明けて二十一世紀も、世紀を  
またいで世界は戦争を続けている。その  
大半は、大国または大国連合による、弱  
小国または紛争国への侵略または武力介  
入による戦争である。曰く、共産主義の  
浸透を防ぐ。曰く、世界に冠たるまたは  
世界の中心であるわが国の言うことを聞  
かず道を逸脱している。曰く、人道支援  
のため座視できない。曰く、テロリスト  
が支配する国である。曰く、大量破壊兵  
器を有する悪の枢軸国である。曰く、そ  
こに住むわが同胞が抑圧されている、な  
どなど。数の上で言えば、その中心に常  
に米国があつたことは紛れもない事実で  
ある。それにしても米国をはじめソ連、

ロシア、中国などの大国が犯した他国へ  
の戦争、侵略・武力介入などは国際社会  
で決して裁かれることがなかった。今も  
ない。大国は何をしてもいいのか。大国  
には政治的かつ道徳的退廃が許されるの  
か。許されるとすればそれはなぜか。

また視点を移せば、大国によるテロリ  
スト集団や小国への武力介入とは別のこ  
とであるが、大国の思惑に基づく国際的  
な政治決着や大国の政治的支配の終了を  
背景にして大戦後や冷戦終結後に生じた  
地域紛争や内乱などにも、大国の犯罪的  
行為の影が色濃く落ちている。歴史はこ  
れらの罪をどう裁くのか。

さて、一方で、テロリストやテロ集団  
はもちろん、大国の気に入らない弱小国  
やその指導者たちは、当然のように容赦  
なく抹殺すべき処分の対象となる。もち  
ろん、たとえばベトナム戦争のように、  
すべてが抹殺されたわけではない。ベト  
ナムでは、大国の思惑が小国に見事に打  
ち砕かれた。そこにはかすかにであるが  
未来への大いなる希望も見えた。

そして今。テロリスト集団と大国連合  
の間で戦われる戦争が当該大国の一般市  
民も巻き込んで進行している。その方向  
に世界が明確にアクセルを踏みこんだの  
は、九・一一（二〇〇一年九月十一日の  
米国同時テロ事件）に際して米国のジョ  
ージ・W・ブッシュ大統領が発した「こ  
れは戦争（戦争行為 acts of war）だ」

の叫びであるだろう。米国は迅速にアフ  
ガンスタンに侵攻、ほどなくイラクにも  
侵攻した。大国の有志連合が米国と行動  
を共にし、やがてそれに合わせるように  
テロ行為が世界のあちこちに常態化して  
行った。その果てに「イスラム国」もあ  
る。近くは、二〇一五年十一月十三日に  
パリ同時テロ事件が発生。フランスのオ  
ランド大統領は先のブッシュ大統領と全  
く同質の叫び声をあげた。「フランスは戦  
争状態にある」と。

テロリストまたはテロリスト集団が特  
定の対象に対して行うテロ行為であれ、  
対象を特定せず無差別に行うテロ行為で  
あれ、テロ行為は決して許されない犯罪  
行為である。同時に、大国または大国連  
合が行う武力介入、侵攻、侵略という戦  
争行為もまた、その対象とされる側から  
見れば、とりわけ非戦闘員である一般市  
民の眼には大国によるテロ行為であるだ  
ろう。実際、赤ん坊から老人まで、男も  
女も大国の武力攻撃、特に空爆の犠牲に  
なっているのだ。祖国も故郷も捨て難民  
として逃れざるを得ない状況のすべてを  
当該地のテロリスト集団だけがつくって  
いるとどうして言えるだろうか。私はテ  
ロを憎む。テロリストによるテロも。大  
国による事実上のテロも。

ふり返って、二〇〇一年九月十一日、  
乗っ取られた旅客機の自爆衝突によつて  
米国の世界貿易センターが崩れ落ちたと

き、米国が攻撃の対象になった背景や意  
味にどれだけの思いがめぐらされたであ  
ろうか。それはもちろん、いわれなき死  
を強制した犯罪行為が決して許されない  
こととは別の問題である。

『九月十一日だった。意を決した数人  
のパイロットによつて異常な針路をとつ  
た飛行機が、彼らの憎む政治体制のシン  
ボルを壊滅すべく、大都市の中心部に向  
けて突進した。瞬時の爆発、四方に飛び  
散る破片、地獄の轟音のなかで崩壊する  
建物、愕然として瓦礫のなかを逃げまど  
う人びと。そして、この惨劇を中継する  
メディア：。これは二〇〇一年のニュー  
ヨークではない。一九七三年九月十一日、  
チリのサンティアゴだ』『暴力の連鎖を  
超えて』岩波ブックレットNo.561）二十  
八年を隔てた二つの「九・一一」（その日  
はいずれも火曜日であった）がどこでど  
う関係し、また関係しないか。それは私  
たちが生きる世界にとつてどんな意味を  
もつか。自分で考えるしかないことだと  
私はまだ思っている。大国による小国へ  
の介入、支配は実に巧妙である。ニュー  
ヨークとサンティアゴに対する世界の反  
応と当該国の反応はあまりに違いすぎる。  
やられたらやり返す、しばしばやられ  
なくてもやる。ブッシュもオランドもア  
ベも、大国の指導者は国のため国民のた  
めにそうあらねばならぬと考えているよ  
うだ。それは戦争をする論理である。戦

## 世界一周旅行記 (18)

若山 哲郎

### 旅の終わりに

いよいよこの航海も終わりになります。一〇五日間の長い期間の旅ですが上陸した所は十四箇国、十七箇所。ご案内のとおり世界一周といっても今回の航路は、インド洋からアフリカ東部を南下して喜望峰を回り、大西洋横断し南米大陸南部南極洋を通過して、再び太平洋を横断して帰ってくるという南半球の最南周りコース。マチュピチュやナスカなどの有名な世界遺産地区が一部あるものの大半は地味な国々ばかり。最初はどうかなと思っていたのですが、日本からは最も遠い国々ばかり、こんな機会でなければおそらく死ぬまでその地を生で体験することはなかったでしょう。

しかし船旅ではこんなに沢山の国々を訪れても滞在はほとんど一日だけ、七〇日以上は船内で過ごします。行く前はさぞかし暇かなと思っていました。前にも書いたように船内生活は様々なイベントがあります。上陸する国の情報、歴史や文化、そして宇宙や星座のこと、そしてピースボートですから少しは平和に関するレクチャーなど。でも、これはしようがないことですがすべてが万人向け。何も知らない若者やおっちゃん、おばちゃん向けのためレベルは想像以上に低いです。担当する招待された講師の知識もそこそこの人で期待外れでした。私の住ん

でいる京都市のカルチャーセンターのほうがよっぽどレベルが上。かつては池上さんなど有名人が担当していて、いまでも宣伝パンフレットに使われているようですが、現在は見る影もありません。

では何がよかったかという点と船内にいる人がボランテイアで開く「自主企画」と言われるものです。私は俳句の会と合唱、JAZZグループをしていました。そして自主ではありませんが英会話グループです。句会は十二回くらい行いました。苦労したことは季語の問題です。南国では二月でも夏の花が咲いているし、星は冬でも南の空になります。けれどもそこは仲間どおし工夫して素敵なのが沢山出来ました。最後には立派な句集も作りましたが、船に乗る前から俳句は作っていましたが、その場、その時に受けた印象をカメラのように句に刻み込めるので本当によかったと思っています。毎句会、三句ほど作ったので相当の数が出来ました。句集に載せた代表句を披露します。

遙かより来たる鳥あり喜望峰

轟々と海処より来る去年今年

青色に刻を封じて氷河あり

キリストが朝日に染まるリオの丘

切れぎれと

バンドネオンが泣く夜更け

原色のシヨールに憂いクスコ路地

夏潮に船首斬り込み怒濤聞く

ラバウルに朽ちたる大砲草いきれ以上お粗末でした。さて次は合唱です。私は普段、京都でバツハ合唱団に入っているため三ヶ月も練習を抜けるのは辛いことでした。少しでも船内で練習をしようと思いましたが、かなわなかった。自主企画の合唱グループに入りました。日本の歌ですが発声練習にはなりました。発表会もしたのですよ。

さて次はJAZZグループです。最初はやる気はありませんでした。JAZZは大昔のことほとんど忘れてしまったから。断ったのですがどうしてもというので参加しました。しかもベースなし。千人もの人がいてJAZZピアノやベースが出来る人おらんのかね。お陰でさんざん演らされました。炎天下のイベント、ナイトクラブ、コンサート会場など。演った曲はスタンダードなのでろくに練習しなくてもなんとかなりましたが。おかげで大分時間をとれましたが。

さて最後はなんといっても英会話。三十二回くらいグループで集まりトピックについて話をしました。例えば「What's the best way how to learn English」英語をうまく話せるようになるのはどうしたらいいのかなど、先生はネイティブなので例えば彼らがフランス語を学ぶのはどうしているのかなどの意見も聞きながら会話するのです。もちろんすべて英語ですから大変。日本語で言うのでも大変なのに。先生がついているので間違っ

争をする側の辞書には、犠牲者とはテロ行為による死傷者と書かれているだけである。しかし、空爆され砲弾を撃ち込まれる側には焼かれ傷つけられ殺される、テロ犠牲者よりはるかに多い無防備な市民がいる。テロリストと市民を区別することなどできないし、戦争する側には初めから区別するつもりもないだろう。それが戦争である。彼らは犠牲者に数えられない。難民となって逃れようとしても戦争をする側に阻まれる。テロの犠牲者にささげられる祈りをニュースで何度見ただろう。そのたびに私は思う。テロリストに対してだけでなく、その祈りが深い怒りとなって、テロの原因ともなった戦争する指導者たち(戦争する政治)に向けられるのはいつだろう、と。そしてまた想像する。戦争法がこのまま実行に移されテロの犠牲者が国内に出たとき、アベは何を叫び、国民はどう反応するだろう、とも。悲劇の前に私は行動したい。戦争する政治の現実など知ったことか。世界のなかで日本が生きて行く道は日本国憲法に則った道しかないのだ。戦はないことだ、それに徹しない限り犠牲者はなくならない。その道を行こう。

馬鹿丸出し平和への道まっしぐら

そのために私にできることは何か。新しい年もそれを考えていきたい。

(かたちは心であり、心はかたちになる) ■大分の素老人

た言い回しはその場で修正されます。まあ訓練ですな。一旦日本語で考えていたらあきませんね。そんなこんなで英語力は上がったのでしょうか。

旅行主催者が提供する講演会などは満足のものも少なかつたのですが、先ほどもいった船内の人がボランテイアで行う講座は素晴らしいものが沢山ありました。古代歴史、戦争体験、武道、気功などなどそれも専門家顔負けのレベルです。普通の人がこれだけ知識を持っているのかと驚きました。皆プロ以上のレベル、そしてなにより情熱があるので話に迫力があります。ほとんどこの人たちのおかげでこの旅の文化レベルも一定の高さを維持できていたようなものです。本当に感謝します。世の中、隠れた素晴らしい人が沢山いるものと再発見しました。

さてさて、このように船内生活はカルチャーセンターとグループ活動に明け暮れる毎日です。でもこれも自由。なにもしなくてもOKです。何日もひたすら本だけを読んでいる人もいます。編み物だけをしている人もいます。人生色々、人それぞれ。しかしおかげで私は持つて来た本の殆どのほとんど読めませんでした。唯一完成したのが熊野さんの「哲学史」に基づいて作成した自分用「哲学の歴史」ギリシア哲学からハイデガーまでの知の道筋を再認識出来ました。

無事に一〇五日間という長い航海を終える事が出来ました。お陰さまで体はい

たつて丈夫でした。誰でも風邪や腹痛、船酔いなど何れかは経験している中で何事もなく生活出来たのは二つの理由があると思います。一つはストレスが少なかつたこと。一人部屋が幸いしています。

人の話を聞くと同居人とのトラブルは多いです。いやがらせ、ケンカもあります。部屋を追い出された人もいます。ストレスの大半は対人です。私の場合、対人ストレスは少ないのですが困つたのは関東語です。調べて見ると純粹に関西発音というのには近畿地方と岡山、四国だけ、あとは九州にしても関東系の語尾を上げる発音。あのさー、これでさー、毎日気が休まりません。やっぱり語尾は下がる関西ことばがゆっくりで休まります。英語で会話していた方がましでした。

あと一つは水分補給を十分にしたこと。室内は乾燥しているため病原菌の発生が高いです。そしてなにより今回実証できたのは水分が体細胞を活性化させるということ。皆様も是非どうぞ。

これは船医の秘訣でもありました。

さて総合評価ですがかなり厳しいものがあります。ピースボートとはすでに名ばかり完全にシニアのレジャー船になっています。そして驚くことにリーダーが確実に三割以上四割はいくでしょう。それも三、四回と複数乗船が多い。ある人はこの船を生活の場に使っています。つまり年三回九箇月は船にいます。まあその人は極端としても若者も少ないです。三十才未満は十五パーセントを切れ

るでしょう。現代の日本社会を象徴しています。そのニーズを反映して社交ダンスやエアロビクスなどの教室が多いです。そしてやはりシニアにとつてもこの船は交流の場となるのでそれなりに必死です。熟年が頑張るピースボート、これです。

世界一周旅行をしてみてもあらためての感想ですが、これは月並みですがいかにも日本という国がパーフェクトかということを再確認しました。あらゆる面で日本は抜きに出ています。安全、政治、経済倫理、道徳、料理すべての面で完璧です。今回行った国ではどの都市も一人歩きは危険でした、現に大勢の目の前でカメラを強引に盗られた人がいましたし、スリなんかは普通です。そして政治、経済の不安定による貧富の差が極端です。また気候も南国でよい面もありますが日本のようにはっきりした四季がなく、季節の移ろいに伴うものあわれや風情もありません。礼儀、作法は勿論、相手を思い遣る気持は日本が数段上でしょう。

今回の船での外国人達の自分勝手には個人の主張が大事とは分かっているも日本人の相手の気持、和を尊しとする風土には合いません。特にアングロ・サクソンは最悪、米人を中心とした人種差別にも等しい人を見下した態度には嫌気がさしました。長期間彼らと生活してみても分かったかことです。でもそれに飼いならされている日本人が哀れでした。これは最初私がある人から諭されて気がついたことです。私はどこかの総理大臣みたいな

安っぽい愛国主義者ではありませんが世界がまた別の価値観で動いていけばもっと平和になつていようかと想像します。

さて、最初に設定したこの旅の中心テーマは「存在」とは何かという哲学的なものでした。三箇月間、船上という閉鎖された異空間に今まで関わりあいが全くなかつた人々と暮らすというのは一つの実験でもあります。その中で「存在」というものは「関係」であるとしか言えません。なぜ無ではなく存在があるのか。それは他があるからでしょう。完全にひとつなもの存在しないに等しい。我々は差異があるから互いに認識出来るのでしよう。しかし今回つくづく思ったのは如何に私は自分の世界を自分に合わせて作ってきたかです。人は生き方において自分の世界を自分の都合に合わせて解釈して生きていくのでしよう。今回のこの空間ではやはり対人ストレスが大きいです。上手くいってもいなくても。なんと今までの私の世界、地域も会社も住みやすかつたことか。世界を無から作るという因縁さは相当なエネルギーを必要とします。

さていよいよ本場の最後になりました。この旅が出来たのは全て私を支えてくれた人のお陰です。勝手気儘を許してくれた家族、地域の人達。感謝の字を幾つなべても気持は表せません。しかしこの旅で学んだ事はまだあります。それは人生はこれからということ。六十三歳はまだ青年です。船の中では七〇歳代が中心。

## 大人の今昔物語 (18)

石川 吾郎

今回は、しみじみとした味わいのある名作です。大人の事情が多いので、教科書に出ない度は四／五。

### 貴族の娘、近江の郡司の下女となる話巻二十ノ四

今は昔、中務なかむすの太輔たふの某たがという人がいた。その人には息子はなく一人の娘だけがあった。財力はもっていなかったが、兵衛ひょうゑの佐すけの某たがという者を、その娘の婿むすめとして娶めとせていた。幾年か経つうち、何かとやりくりをしてその婿をもてなすので、婿も離れがたく思っていたところ、

(完)

中務の太輔がなくなつたので、母親は万事心細く心配していたが、その母親もほどなく病を患い、寝込むようになった。娘はなげき暮らしているうちに、その母親もなくなつてしまつた。娘は天涯一人遺されてしまい、嘆き悲しんだが、どうしようもない。

家の中の使用人もだんだん出ていってしまったので、その娘は夫の兵衛の佐に言つた。「親が存命の間はなにかとお世話ができたのですが、このように生活が不如意になつてしまいましたので、あなたさまのお世話も思うにまかせません。といつて見苦しいなりで出仕していただくことはできません。こうなつたからには、あなたさまのお考えのまま、よいようになさります。」

すると男は「何でお前を見捨てるようなことがあるのか」などと答えてそのまゝそこに棲んでいたが、装束などもだんだん古びて見苦しくなつてきたので、「他所たがところにおいてになつて、なつかしく思われるときに、こちらへお便りをくださいませ。このままで宮仕えをなさるのはよくありません。見苦しくなります」と妻が強引に進めるので、男はどうとうその家を出て行つたのだつた。

その後妻は一人暮らし、哀れで心細いことはなほだしい。家の中はがらんとして、使用人もいない。ただ一人の童女の召し使いがいたが、着物もあてがわれず、食事にも事欠くようになったので、困り果てこれも出て行つてしまつた。男の方も、「心残りだ」といったものの、さる人の婿に入つたので便りもしないままに月日が経つてしまつた。ましてその家を訪ねることもなかつた。そんなわけで女は一人、壊れかけた寝殿の片隅にひっそりと生きていた。

その寝殿の一方の端に、年老いた尼が宿を借りて棲んでいたが、この女を哀れに思つて、時々手に入つた果物や食べ物をもつてきてくれるのを頼りにして生きていた。そうこうするうちに、この尼のもとに、長期の宿直に召されて、ある郡司の息子である若い男が宿をとつた。この男、尼に「退屈だから、いい女を紹介してくれないか」と頼んだ。尼は「私は年をとつて出歩いたりいたしませんよつ

て、いい女はんがどのあたりにいるのかもよう存じませぬ。それよりこの御殿には、大層べつびんのお姫さんがただ一人生活に困つておいでのようですよ」と答える。男はそれに食指を動かし、「その方を俺に紹介しておくれ。心細く生活しているよりは、ホントにきれいだつたら俺の国に連れて帰つて嫁にしよう」と言うので、尼は「そのうちこの話しをしてみましょう」と引き受けたのだつた。

男はこのように言い始めてからというもの、早く早くと尼をせきたてるので、尼は女のもとに果物などをもつていくついでに「いつまでもこのような生活を続けておいでになるわけにはいきませぬ、い」などと言つて、その後「今近江から、かくかくの人の息子が京に上つてきておられますが、こんなふうにはいらつしやるより、国にお連れもうしあげたいと、熱心におつしやつておいでですので、そのようになさいませ。このような無聊な生活が続けられるよりは」と進める。女は「何でそんなことができますでしよう」と断るので、尼はそのまま帰つた。男は心せいで待ち切れず、弓などを持つてその夜、女の家をのりやうろついたので、犬が吠え、女は普段より恐ろしく心細さがいや増しているうちに、夜が明けて尼を訪ねてみると、女「昨夜はひどく恐ろしい目にありました」と言う。尼「やから言わんこつちやない。そのように言はる男はんについて行かれるのが

ええんどす。これからはいよいよつらいことが増えてくるにきまつとるんどすよつてに」と説得する。すると女の心が揺れる様子をみて、尼はその夜にこつそりと男を引き入れた。

\* \* \*

その後男は女にほれ込み、女の高貴な心ばえを離れ難く思い、近江へ連れて帰った。女の方もこうなれば他にどうすることもできないと思い、この男についていった。ところがこの男は国元にすでに本妻をもっており、親の家に棲んでいたの、本妻が大変な妬みようで、罵倒するので、この男はこの京の女のもとに寄り付かなくなってしまう。そんなわけで、この京の女は男の親の郡司に使われていたのだったが、その国に新しい国守が赴任してこられるというので、国を挙げての大騒ぎになった。

そうこうする間、「守の殿がご到着されました」と、郡司の家も騒ぎあつて果物や食事などを豪華に準備して、国守の館に運ぶうち、郡司は、かの女を「京の」と呼んで使っていたのだったが、館へ物を運ぶのにも沢山の人数が必要だったので、この「京の」にも物を持たせて館へやらせた。

一方国守は、多くの男女の使用人たちが物を運ぶのを見ている中に、この「京の」が他の者とは一際ちがって気品があり事情がありそうに見えたので、子供の使用人と呼んで内密に「あの女はどんな

素性のものか尋ねて、夕方にここに参らせよ」と命令する。この使用人が尋ねるに、これこれの郡司の使用人であった。

そこで郡司に「殿様がこうおっしゃっている」と伝えると、郡司は驚いて家に帰り、「京の」に風呂に入らせ、髪を洗わせ、など念入りに世話をした。郡司は妻に「これを見る。京の」が手入れをした美しさをと感嘆した。そしてその夜、美しい着物を着せて国守に献上したのだった。

\* \* \*

何とこの国守こそ、この「京の」の元の夫・兵衛の佐その人だったのだ。そんなわけで、この女を近くに召し寄せてじっくり見ると、国守は何となく見覚えがあるように思い、またかき抱いて共寝すると、極めてしっくりとしている。不思議に思つて「そなたは何者だ。不思議に見覚えがある気がする」と言うと、女はそうとも気がつかなかつたので「わたしはこの国の者ではありません。京におりました者でございます」と言う。

国守は「京の者が来て、郡司に使われているのだ」と納得しながら、その女が妙に親しくなつかしく思えるので、夜な夜な召し上げていたのだったが、やはり不思議に見覚えがあるように思われたので、女に「そなたは京では何者だったので、さぞや事情があつてこんなところに来ているのだろう。そなたが愛しいから言うのだから隠さずに申せ」と言うと、

女は隠すことができず「実はこれこれの者でございます。あなたさまがもしや昔の夫に縁のあるお方ではなからうかと思つておりました。これは日ごろ申し上げませんでしたが、強いてお聞きになられますのでお答え申すのです」とありのままを語つて泣くので、国守は「そうだったのか。不思議に思つていたのだ。お前、わしの妻だったのだ」と気が付いて、胸が詰まつて涙があふれてくるのを、堪えようとしている。そこに湖の波の音が聞こえてきたので、女これを聞いて「これは何の音でございます。恐ろしゅうございます」と言うので、国守は次のように歌を詠んだ。

『これぞこのつひのあふみをいといひつ世にはふれどもいけるかいなみ』

(これこそが近江の湖の波音だ。これまで逢う身を避けてきたが、あなたと一緒になければ生きていく甲斐がない)

と「自分はまぎれもなく、昔の夫に相違ない」と言つて泣くと、女は「ほんにあなたは元の旦那さま」と思ったが、心に耐えられなかつたのか、物も言うことができなくなり、ただどんどん身体が冷たくなつていくので、「これはどうしたことか」と国守が騒いでいるうちに、女は亡くなつてしまった。

これを思うにたいそう哀れなことだ。

女は求めていた元の夫だと解つたと同時に、自分の運命を思いやられて、恥ずかしさに耐えられないで死んでしまったの

だ。これは男の方が思いやりがたりなかつたのだ。真相を表に出さずにただ養つてやるべきであつたのだ。

女の死んだ後の事情は知られていないと語り伝えられていることとことだ。

《終わり》

《コメント》

この物語は、堀辰雄が「曠野」という小説に仕立てています。私は堀辰雄の小説を高校時代に読んだのですが、『今昔』の中でこの話を読んだとき、すぐに堀辰雄の小説を思い出しました。それほど堀辰雄の小説が、この物語の雰囲気を再現しているということができるのでしようか。

当時の貴族は、妻の実家の財力に依存していたようです。前の妻を忘れられるものなのかは、ゲンダイの男の立場からはなはだ疑問ですが、当時はあり得る話だったのでしよう。

また女が「恥ずかしさに耐えられないで」死ぬという点も、ゲンダイ的な目からはちよつと信じられない感じがしますが、この点はこの話のキモです。ではせまません。

普段おとぼけが多い記者の最後のコメントは、今回そういうやり方もあり得たのかと、と考えさせられます。

明石 幸次郎

M井は歩きながら、「今日は、明石君に話があつたんで、君の方から声を掛けて貰つて有難う」と、いつもとは違う、真剣な顔つきで言ったので「何や、行き成り。真面目な顔して、話があると言うのは？結婚するんか？それとも、会社辞めるんか？」と先回りして応えた。

「何で分かるんかのう？両方とも、あたつちよるわ」と驚いた様子で返して来た。「結婚は別に驚かんが、何で会社を辞めるんや？ショックやなあ。まあ、歩きながらでは、詳しい話が出来ないわ。スナックは「時からオープンや、その前に腹ごしらえしながら話をしようや」と内心は大変驚いていたが、平静を装い応えた。「何処がええかのう。わしや、何処でもええぞ」といつものM井の表情に戻った。

明石は「それなら、新入社員の頃、お前と同期のY山と三人でよく食べた。長崎皿うどん」とビールは、どうや？そこやつたら、今日行くスナックにも近いしなあ」と提案した。

「Y山のう？そういえば、東京に配属されたY山と君と、心斎橋をブラブラした帰りに行つたなあ。皿うどんと言うと、Y山のまんまるい顔が浮かぶぞなあ。久しぶりじゃ、行こう」と、その店に向つて歩いて行った。

店に入り、空いた席に着くや否や、店

員が水とメニューを持ってきた。二人はメニューも見ずに、皿うどんと瓶ビールを注文した。

運ばれてきたコップの水を飲んで一気に飲んで、「ワシが言うのも何じゃが、Y山は、東京で真面目に仕事しとんかのう？首にならんか心配じゃ」とM井が笑いながら話しを終わるや、店員が注文したものを持ってきて、素早くテーブルに置いた。

この店は注文してから出て来るまで、客を待たせない。兎に角、出てくるのが早い。

大阪人は待つのと、並ぶのは嫌いで、オーダーすれば、大衆的な店は大概是、十分も待たせない。大阪の食べ物屋で客を待たせば、その店は評判を下げるし、場合によれば、遅いという事で客がキャンセルして、出て行ってしまふこともある。その点で、この店は、いらつちの大阪人にピッタリな、安くて、美味く、その上に出てくるのが、早いときいているので、改めて、明石は大阪の難波に帰つて来たと感じた。

明石は、ビールで乾杯した後、「Y山か、まあ、相変わらず適当にやつてるのと違うか？本人も可哀想やで。海外業務部などと、外から見たら、聞こえが良い部門に思えるが、中味は海外事務所を管理しているだけや。Y山の能力を出せるような仕事がないのと違うか？アイツもやりようがないのでは？アンタとこの人事企

画もよく似てるのと違うか？」と、皿うどんに箸を付けながら「明日、東京に出張やから、時間があれば、まるい顔見て来るわ。処で、さっきの話の続きやが、結婚は目出度い話やから、後から聞くとして、何で会社を辞めるんや？今まで、我慢してきたのに、これから君の力を発揮する場面が増えて、仕事も面白くなり、やりがいも出てくるのと違うの？」と言つた後、皿うどんを口に入れて、M井の言葉を待った。

ビールを一口飲んでから、暫くして「ワシは、七年程務めたが、自分が大きな組織を動かして行くような能力があると思わんし、かと言つての、上司からあれせい、これせいと指示されるのも嫌でう。人事の仕事は、自分の性に合つてないわ。まあ、会社での仕事がワシに合っていないやのう。これ以上我慢したら、ワシという自分がうなつてしまひそうでのう。気が付くのが遅いがのう、この頃、それが、分かつたんでのう」と真剣な顔つきで言つてから「この皿うどんは、美味しいのう、ビールに、おうとるのう」といつもの緩んだ、やさしい顔つきになつて、コップに残つてビールを旨そうに飲み干した。

「君のようなエリートが何を言つてるんや。会社では、上司の指示に従つて、仕事をするのは、当たり前やないか。又、本社人事部と言うたら、会社の中では自他共認めるエリート集団やないか。その

中で企画課はK内人事部長の発案で出来た組織で、其処に新入社員から配属されると言うのは、それだけ、K内部長が君に対する期待が大きいのと違ひのうか。今日も転勤の挨拶でK内部長の処へ行くよ君の事をしきりに気に掛けて、お前のような人事部的でない社員が、今の真面目な社員ばかりの人事部の中では必要としていられると言われてたぞ。考え直すことは出来ないんか？」と言つて「明石君、それは、Kさんは、ワシを褒めてくれてるのかのう？」

「褒めていられると言ふか、君の人事部的でない、おもしろい人柄と言ふか、型に嵌らない個性を仕事に発揮して欲しいという事と違ひのうか？保守的な人事部のあの重たい雰囲気は新風を吹き込んで、少しでも体質を変えて欲しいと、期待しているという事と違ひのうか？」

「そう期待されてものう。ワシひとりでは、人事部の体質を変えようなんて、畏れ多くて、どうにもならんぞ。権限のある上の人がそもそも、どこをどう変えていくんかと言ふビジョンを示すことがまず、必要な事じゃのう。それで、管理職がそのビジョン実現に向け、意識改革を行い、実行に移さないと、ワシのような下の者だけが、何かを変えようと提案をしたところで、課長レベルで止まつてしまふのがオチやぞな。まあ、ワシがやれることは、宴会で指名がかかれば、落語を一席ぶつて、皆を笑わせるくらいが

関の山ぞ」

「まあ、お前ひとりが意気込んで、やってみたところで、ドンキホーテになってしまいわ。K内さんが考えておられるのは、短期的ではなく、十年先を見て、君を含めた、これと言う人材をその間に、育ててやっていこうと、されてるのと違うか？その頃は、あの人は取締役人事本部長になっておられるので、期待されてる君なんかも当然管理職として、例えば、人事部長はまだ無理として、副部长位になつてゐるわなあ。実務のトップとして、それこそ、人事部制度の改革というか、会社の体質を変えるような人事制度を作つてゐるかもしれへんぞ。その時は、俺を引き上げてくれよなあ」と明石は、M井が辞めることを思い止まらせようと、冗談を交え自説を述べた。

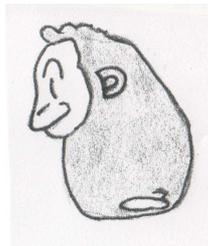
「そんな人事構想は、K内さんの頭の中にあつたとしても、ワシは、その間にどこぞの工場の勤労課に転勤になつて、そこで、器用に立ち回りができないので、その工場長や、労働組合幹部に嫌われ、罰点をつけられ人事部に戻らなくなるのが見えてるぞなあ。わしも、そんな例をぎょうさん見て来てるんやけんのお。その一人になるのは、嫌じゃ。わしが会社を辞めても、ワシに替わる人材は幾らでもおるがのう」

「俺は、工場に転勤してもお前は嫌われることはないぞ。確かに、お前はゴマをするような器用さはないが、誰に対して

も誠実に接し、それに弱い立場の人に対

する思いやりがあるやないか。現場の社員に好かれると思う。今の人事部は何や、労働組合幹部にはだけは、ペコペコしてゐる。労働組合も組合幹部の為の組合見たいや。幹部は組合員族になつてしまひ、人事、勤労も建前は別として、それを是認しながら、上手くお互いを利用してゐるところがあるやろ？組合員の為の組合幹部とは思へんぞ。まあ、それはそれとして、君のキャラクターは「スルメ」のようなもんやから、じっくり付き合えば、良さが段々と分かつてくる。特に酒飲みでスルメが嫌いやと言う人はいないで、酒飲みは皆、君と付き合えば、直ぐに君の良さを理解するのと思うぞ。どこに行つても大丈夫やで。今の企画課よりは、工場の勤労の方がマシやで。俺の短い工場経験から言うのも何やが、本社スタッフだけの経験では、会社が製造業である限り、現場を知らない、片端やで」と日頃、感じていたことを話した。

M井は、皿うどんを頬張りながら、「ビールもう一本」と店員に向つて注文してから、「君に色々と期待を込めて、引き止めてくれるのは、有難いがのう。もう、ワシは、辞めることに決めてしまつたけんのう」と、強い口調で言った。



## 雲と群衆

大江 雉鬼

その昔、流行語に着目して時代を語る論考がもてはやされたが、最近ではそれも目新しいものではなくなった。その手の文章が力を失つたのは、分析対象に作為性が色濃くなつたからではないか。雑誌やテレビが態とらしく連呼する言葉ばかり取りあげられても鼻白んでしまう。

十年二十年の過去をふり返つて「あの頃は」というなら、作為性も含めて時代の分析になるが、現在を扱う場合はそうもいかない。それが本当に流行しているのか、それ以前に流行をどう定義するのか、それが問われるのに、流行ありきの場所から始められると、購買欲を刺激するために書かれた情報誌と区別もできない。

前回、ユビキタスなどの言葉を取りあげて広告会社の思惑に誘導された流行語の事例としてみたが、実際にそうしたイメージ戦略が行われていたのかなど真実のほどは分からない。だが七、八年前のユビキタスや三、四年前のビッグデータには、メディアばかりがその言葉をくり返している感が否めなかつた。それでも改めてふり返るなら、時代的にも宜なからんと思わせる側面はある。コンピュータと社会の関係を考えると、二〇〇〇年代後半は一つの転換点だつたからだ。その方面の歴史を俯瞰しないと分かりづらいが、かいつまんで言うと、社会全

体に及ぶネットワークの整備が進み、コ

ンピュータの位置づけが文字通りのPC（パーソナルコンピュータ）個人が使う電子計算機）から、サーバーに接続された端末へと移行し始めたということである。ユビキタスという言葉は、あらゆる場所ですばる機能（のコンピュータ）が活用できる環境という原義なのだが、高速回線が社会に行きわたつて各人がそれに接続する端末を使つてゐる未来図がイメージされてゐた。このユビキタスという言葉は広告会社が流行らせようとしたのは、そんな未来図を見据えて企業や個人の意識変革、ひいては相応の資金移動を伴う環境整備を促してゐたからなのだろう。だが生憎なことにセールストークがいくぶん大きくなりすぎたらしい。キヤッチフレーズの一人歩きとなり、言葉自体がお蔵入りとなつてしまつた。理念がないがしろにされて実態が追いつかなかつたと言う方が適切かも知れない。思い描かれていた未来図が否定されたのではないにせよ、言葉自体は死語となつたと云つてもいい。

このユビキタスと同じ観点から使われるようになった言葉にクラウドというものがある（いまも健在）。ユビキタスが端末の方に向いてゐたのに対して、クラウドは強力なサーバーを意識している。膨大なデータを蓄積、一元管理するだけでなく、端末からは巨大すぎてぼんやりとした雲（Cloud）にしか見えない、そうし

た機能群を実装したサーバーを構築することがクラウドコンピューティングである。その環境下での端末は、機能の一部をサーバーより借り受けて具体的な処理を行うだけである。事業規模が大きな企業ではクラウド化も進んでいるが、世の中のすべてがそちらに向いているわけではない。小さなところでは必要性に直面していないところも多いし、家庭レベルのコンピュータに至っては相変わらずパーソナルのままである。そういう意味では、クラウドという言葉も商機に直結する使われ方一色になっても不思議ではないが、ユビキタスの時に比べるとテレビCMなどでの使われ方は控えめになっているようだ。同じ轍は踏まないといったところなのだろうか。

ところで、カタカナにすると同じクラウドでも、雲のイメージで語られるのは別のクラウドが、このところ話題になっている。それは群衆を意味するクラウド (crowd) であって、クラウドファンディングである。ファンディングとあるところからわかるように、これは群衆に協力を求める資金調達の方法である。一般からの提供という点に注目すれば、年末の風物詩となっている赤い羽根共同募金や、アメリカで活発な選挙戦でのネット献金もその一種だが、今日の日本でクラウドファンディングと呼ばれているものは、もっと限定的である。すなわちインターネットに事業内容を明記して資金の

提供を呼びかけるとともに、協力者には相応の報酬を保証する、そしてそれを専門的に行うサイトに拠ってシステムティックに実施されているものを指す。

とある商品開発での話。新製品のアイデアがあっても商品化する資金が用意できないと、資本力のある大手企業にアイデアを売るしかなかった。だが、それでは発案者側の主体性は保てないし、大手側の都合に左右される。結果、零細事業者による製品開発は、最初の段階で頓挫することがほとんどだった。それに対して、試作品が用意でき、優位性をインターネットでアピールすることができればなら可能性も広がる。これは大手企業の都合、端的には担当者の一存ですべてが決められてしまう状況に比べると雲泥の差である。あるいは、イベントの企画でもいい。イベントの意義を訴えることができ、資金面で参画するメリットを伝えることができるのなら、スポンサーになってくれる企業を探して回るしかなかった資金集めも違うものになる。

もちろん製品開発であれイベント企画であれ、第三者に届けるに足る具体性が備わっているか、インターネットでのアピールが衆目を集めることの現実性はどのくらいなのかなどの課題はいくらでも思い浮かぶ。さらには、より肝心なところで、衆目に触れたところで資金調達につながる蓋然性は低いというシビアな指摘もついて回る。だが可能性の話をする

なら、資金調達の方法は従来の姿とは変わりつつあるのは事実だし、そのスタイルのファンディングをサポートする企業が存在するところを見ると、薄っぺらい夢物語ばかりではなさそうなのだ。

個人的にはこのクラウドファンディングに期待するところが大きいのだが、詳しく触れるのは稿を改めることにして、最後に具体的な事例を挙げておこう。現在も進行中の国際コンペである月面探査プロジェクト、それに日本から参加しているのがHAKUTO (ハクト) という民間チームである。このチームは探査機の製作と打ち上げに必要な資金を得るために、調達活動の一環でクラウドファンディングを実施していた。中核の事業は月面探査だが、それに便乗する形で月面を舞台にアニメのシーンをリアルで再現させるという企画をファンに向かって呼びかけたのである。そして設定された目標額が一億円で、その五〇パーセントまでの達成となったようだ。一〇〇パーセントに至らなかった時点でチャラ、結果は不成立となったのだが、内容のユニークさに取り組みの真剣さが備わっているのなら、それに現実的な行動で応える群衆 (crowd) は存在するようだ。

## 新連載 孫ウオツチング

福田 圭

二〇一五年は歴史に残る年になりそう  
だ。二〇一五年九月十九日安保関連法(戦  
争法) が強行採決された年として。

そして、SEALS、ママの会、学者  
の会、ファンクラブなど「民主主義・立  
憲主義を守れ」という新たな民主主義の  
運動が全国に広がった年として。

その二〇一五年の九月三〇日に初孫が  
生まれた。我が人生にとって、さらに特  
別な年となった。

九月三〇日生まれの有名人は多い。石  
原慎太郎、五木寛之、内田樹、東山紀之  
などなど。

なお、九月三〇日は、あの青春スター、  
ジイエームス・ディーンの名日でもある。  
さて、我が孫はどのように成長・発達  
していくのか楽しみだ。そこで、毎月、  
孫ウオツチングの道楽を「芥川だより」  
に掲載させていただくことにする。

二〇一五年一〇月十三日(月) 初めて  
遠方に住む光(ペンネーム)に出会う。  
抱いてみると重みがあつて(三〇〇〇  
グラム強)、温かい。生きている! 生命  
の誕生を実感する。人は死んで有から無  
になる。一方、人は生まれて、無から有  
になる。大人しく、座布団の上で、スヤ  
スヤ寝ていた。寝顔がかわいい!  
理屈抜きに孫はかわいい!

## 埋め草

正月早々、びつくりするニュースが飛び込んできた。デビッドボウイの訃報である。ロックアーティストには、普通のファンとは別に「信者」とでも呼ばねばならないコアな支持者もつ人々がいる。デビッドボウイは、まさにその一人である。私自身がその信者層に入るかという、答えは明快にNONである。だがデビッドボウイには信者層がいることは重々心得ている。だからこそ訃報に接したとき、これは大きなニュースだと感じたのである。

個人的な話で一ファンを越えた信者云々をいうのなら、私の場合はジョンレノンがその対象だった。だからこそ一九八〇年十二月九日のニュースに接した時には茫然としてしまい、翌日の期末テストでほぼ白紙の解答用紙を提出して教師たちを慌てさせた（ちなみに、ジョンレノンの命日は現在では、全世界共通で十二月八日と記されるが、これはアメリカ時間に合わせているに過ぎない）。

信者にしてみれば、信奉の対象がいなくなることはそのくらいに大きな事件なのだが、今回のデビッドボウイの件でも茫然と立ちすくんでしまった人たちが日本にも少なからずいるはずだ。

さて、そんなデビッドボウイの訃報だったが、あらためてベストアルバムを聴いてみた。Ziggy Stardust & Spaceman

などには微妙に感じるところはあるが、七〇年代後半からの楽曲にはさほど反応できないのは、たぶん私自身が信者ではないからなのだろう。そんななかでもふと耳がとまった一曲があった。それがAlabama Songである。この曲は、どこか類靡的な雰囲気漂わせるドアーズの曲として知っていた。ドアーズの代表曲というところ、常識の範疇でLight My Fireになるのだが、個人的にはそれ以上にAlabama Songに惹かれていた。それゆえにドアーズの代表曲Alabama Songという形での認識となっていたのである。それがデビッドボウイもシングル曲として歌っていたことを知り、やはりあの歌は名曲だったのだと、自らの先見性をほくそ笑んだわけだ。

ところが、いい気になっていたのもそこまでだった。デビッドボウイも歌っていたことから、あらためて調べると、ドアーズのオリジナル曲でもないことが分かった。ドイツの劇作家ブレヒトの戯曲「三文オペラ」（一九二八年）の劇中歌であり、クルト・ヴァイルの手によるものであるとのこと。

この落胆は、喩えていえばこんな感じになるのかも知れない。誰でも知っているアイドル歌手とある歌をヒットさせたとする。ところが、その歌は七〇年代の歌謡曲全盛時代に、某新人歌手がアルバムの数揃えに歌っただけで、何の話題にもならなかった歌の焼き直しだった。

その七〇年代の歌を、たまたま知っていたことで得意がっていたのだが、ほんの少しだけ調べてみると、その歌は実は戦前の佐藤千代子か藤山一郎の持ち歌だったという事実が突きつけられた時のガツカリ感……。

ともあれ、煮え切らないオチになったが、ドアーズの歌うAlabama Songが名曲であるとの考えは変わらない。(C)

## 編集後記

### 謹賀新年

明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。今年も、暮れから新年にかけ天気がよくて、穏やかな正月でした。

私も、近年になく落ち着いた正月を迎えることができました。おかげさまで体調も良くなり若返ったようです。

やはり、歩き続けることが、心身を鍛え、心を落ち着かせて和ませ余裕を与えてくれます。

認知症の義母も元気で病の進行が止まっているかのようです。部屋で毎日、楽しく歩行訓練を続けている為かも。

あれやこれや、いろいろとありますが、元気が一番です。その為には、歩くことです。皆さん歩きましょう！

これは私が確信した真理です。

(嘉)

## 「迷い猫笑い猫」出版プロジェクト

【広告】

芥川だより96号掲載の投稿小説「消える」は、独特の文体で日常に潜む不条理感を抽出した短編でした。office34では、同じ作者（古城悠）の小説「迷い猫笑い猫」の出版を目指してクラウドファンディングを実施しております。これは3月8日までに、事前予約を含めたご支援金額が所定の条件を満たした場合のみ出版されるという企画です。詳細は下記のサイトをご覧ください。

◆「迷い猫笑い猫」の出版を通じて文体を読む楽しみを広めたい◆

<https://readyfor.jp/projects/waraineko> または【検索/迷い猫笑い猫】

お問い合わせ office34 TEL: 075-711-4688 〒603-8083 京都市北区上賀茂向繩手2-2-12

《おことわり》支援にご参加いただくには、レディフォーのサイトにて会員登録のうえ、商品の購入予約（要クレジットカード）をしていただく必要があります。決済はファンディング成立時にのみ行われ、不成立の時は予約が自動でキャンセルとなり、請求は発生しません。

さらに満たされた一年へ

あけましておめでとうございます。今後とも愛読の程おねがいます。

今、芥川だよりのページを改めてめくると、その始まりには心配や不安、多少の戸惑いは、あつたけれど基本的には新鮮さに満ちていたように思います。長い間には人の気持ちに移り行くもの、日々を常に新鮮に感じ続けるのは、なかなかむずかしく、理想通りにスマートであるわけではありません。

十年間を振り返れば、いつのまにか、小ささまざまな生活感、それは時には、楽しい気持ち、これはぜひたくだと感じた心の全ての裏には地道な生活があるのです。

不思議なのは、そんな日々の中でふと急に何か腑に落ちて「楽になる瞬間」が必ずあるということ。そして私にとっては、その瞬間の多くは「芥川だより」を読んでくださっている皆さんのおかげです。そのお付き合いの中にあつたように思います。

忘己利他「もうこりた」

字の通りです。天台宗のお坊さんの教え。私は何度か心に呼びかけました。この年令で何かを知る楽しみはない……。どこかでじっと思っていたのです。

その自分に、はたと気づいたので。同時に改めて日々の中で小さな新鮮さを見つけよう。

同じメンバーで日々積み重ねることで見えてくる新鮮な考え方、暮らしの一面を少しでも見つけて教えてもらえれば嬉しいのです。

人生は「てきとう」に

師走の書店や文具具店で客の多い所は、新設の手帳コーナー。やはり客が足を止めるようになるのは、今頃なのだろうか。

売れ残ったのは、どうなるのだろう、どう処理されるのか。のぞいて見たくなる。

十月頃だった、来年のカレンダー。「僕の趣向をいれて作っていますから、十二月早々に持参します」とあつさりお茶を飲んで別れたのに、未だに届かず。体裁のよいあいさつ代わりに終わったのか。カレンダーも手帳も準備万端ととのえてあるから気持ちには安らいでいるのだが或る日、信号の手前で見覚えのある顔がある。「あの人、あいつだワ」と思わず声をかけそうになったけれど、赤青に左右されて通り過ぎてしまった。不況風のせいかな手帳などは買うものになつてしまった。好みもそれぞれだが、私は常に同じ仕様のものを使っている。最近はこの手帳代わりにスマホを使う人も多いらしい。

私のような手帳派は、ちびた鉛筆で予定を書き込むのが、たまらない楽しみなのだ。又、全く別のことを思い出しメモすることが多いので三冊くらい手元に会わせて、その日の事を思い浮かべて楽しんでいる。

指を使うのは、手書き派も、スマホ派も一緒だが、使っている脳の場所は違うかも知れない。

野菊一輪手帳の中にはさみけりこんな使い方もある。

うれしいコトバ

吉田（お母さん）へ

十二月六日

お誕生日おめでとう

二十歳×何回目のお誕生日

シガラキ「信楽」に行った友達の皆様さんから胡蝶蘭の鉢植えが送られてきた。

二〇名の皆さんから、ますます元気で、何もかもに頑張ってください、というメモ書きもあり、私は跳び上がるほど、うれしかった。

早速一句をそえて礼にかえる。

今日生きることの幸せ

冬のらん年重ね らんで祝う

友ありて生きている幸せ

はこぶらの鉢

ほんとうにありがとう。うれしい。

俳句

土田 裕

東京に

タワーとツリーの初景色

二人して常と変はらぬ松の内

大福茶湯気もゆるりと

年を告げ

人日や中吉ならば善しとせん

呼び声も掠れておりし達磨市

